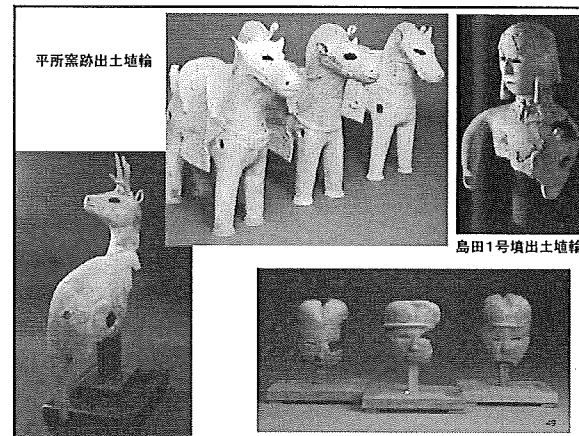
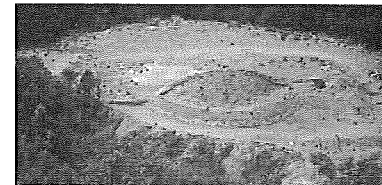




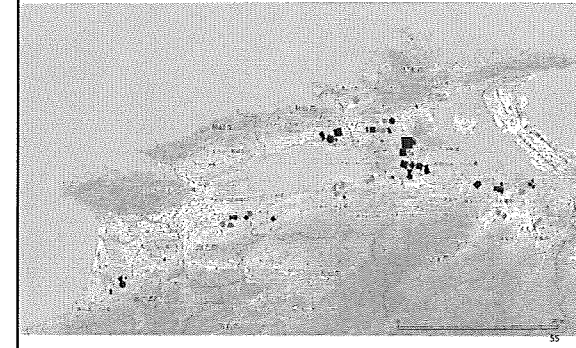
③5世紀後半の一時期、首長墓は帆立貝形(井の奥4号墳)や前方後円墳



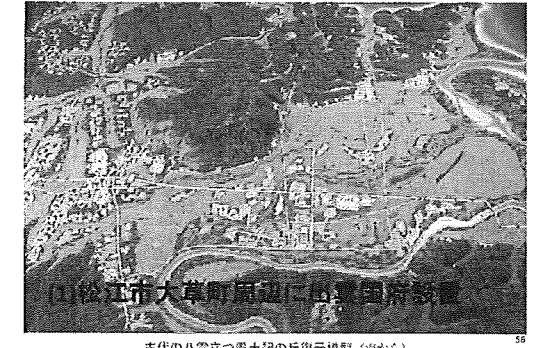
井ノ奥4号墳



古墳時代中期頃の出雲の主要古墳

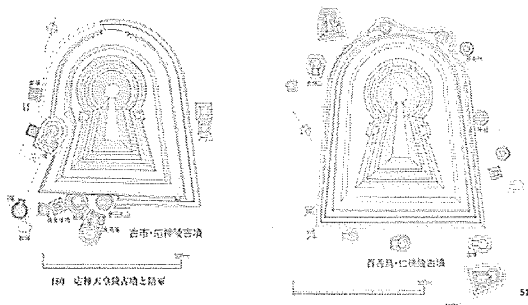


6. 律令期(7世紀終わり～8世紀)の松江周辺



④大王墓の陪冢と連動した墳形

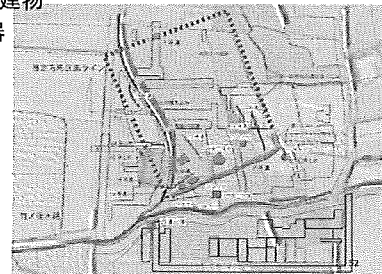
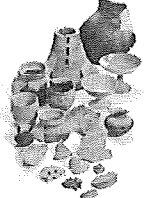
- 応神陵古墳の陪冢は方墳、仁徳陵古墳の陪冢は帆立貝



⑤首長居館の存在

- 出雲国府跡の下層に古墳時代中期の遺構

- ・四角く溝が囲む
- ・扁平な角柱の柱を使った建物...古墳時代特有の祭殿など特別な建物
- ・大陸系の土器の大量出土



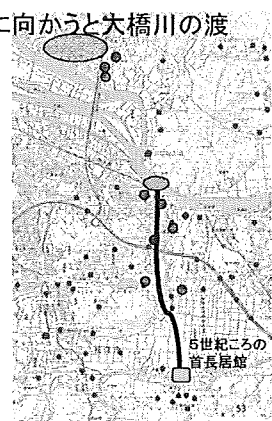
①7世紀終わり頃、意宇平野の南、5世紀の首長居館と同所に出雲国府が置かれる。

- ・○古墳時代の出雲東部の中心地が、出雲の政治・行政の中心地となる。
- ・○『出雲国風土記』によれば、東西の古代山陰道と、隠岐に向かう枉北道が国府の近くで交差する。
- ・○枉北道は大橋川で朝酌渡に至り、そこが水陸交通の結節点として発展



⑤首長居館から北に向に向かうと大橋川の渡しに到達...道の存在

- 想定される道の周囲に首長墳が造られる。
- とくに五世紀前半の古墳は大橋川を望む位置
- 大橋川北岸でも、従来の中心地から大橋川沿岸に首長墓が移動してくる。



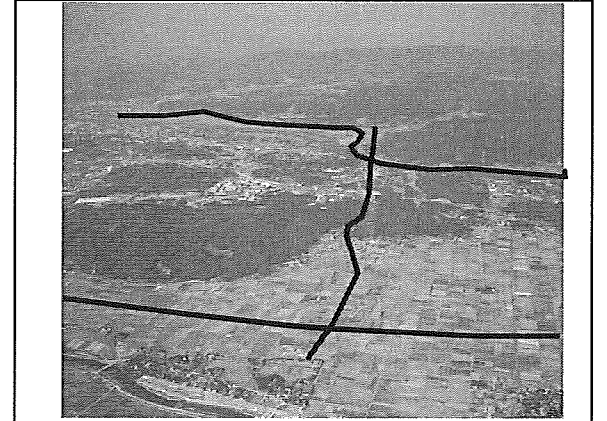
(2)中海から宍道湖を結ぶ大橋川の促戸を押さえることで流通と交流を管理

①古墳時代になり、ヤマト王権による流通の緩やかな管理

- ・東からの新たな文化や物品、人の移動が主体となる。
- ・中海の入り口の促戸の重要性
- ・松江市の南部(意宇)の勢力と北部(島根、秋鹿)の勢力の政治的結合

※朝酌促戸。東に通路があり、西に平原がある。中央は渡し場である。ここは釜を東西に設けている。春秋に出入りする大小さまざまな魚が時として釜のあたりに集まって、飛び跳ねて風邪を押し水をつく勢いで、あるものは釜を破り、あるものは陸に跳ね上げられ干し魚となって鳥に捕獲される。大小さまざまな魚で、浜辺は騒然とし、家々はにぎやかで、人々は四方から集まってきて、自然に酈(いちくら)ができる。[中略]朝酌渡。広さは八十歩ほどである。国庁から海辺に通う道である。

[島根県古代文化センター編『解説 出雲国風土記』]



7. その後の松江周辺

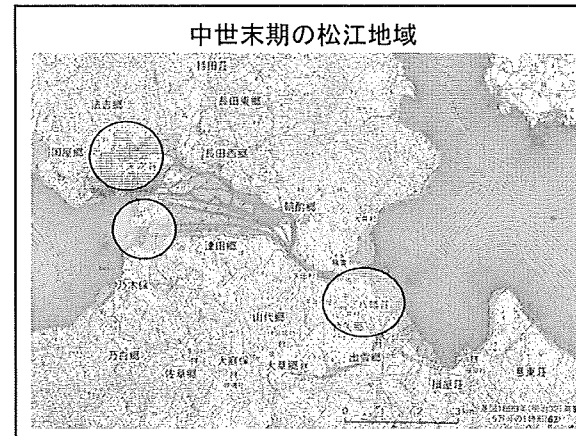
(1)出雲国府が中世府中として政治の中心が引き継がれる。

①平浜八幡宮、安国寺の存在などから、中心は竹矢地区か。

- 馬潟付近に港ができ、その近くが発達したものであろう

②その後も馬潟、白潟、末次、川津など、砂州上の高地や潟湖の奥が拠点として発展

61



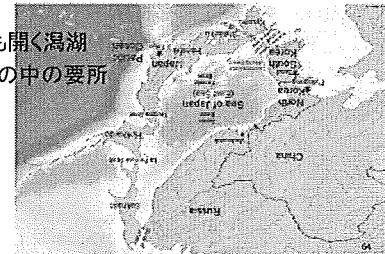
大きな潟湖の中に小さな潟湖

- ・旧石器時代の地形に海水が浸入
- ・東西の両側に砂州が形成され、中海・宍道湖という大きな潟湖が形成
- ・中海・宍道湖の小さな湾に潟湖が形成され、一部は陸化、一部は小潟湖となる。
- ・大潟湖と小潟湖の入れ子
- ・大潟湖は波静かな交通の大動脈
- ・小潟湖は舟が停泊できる港湾として機能

63

日本海に突出する島根半島

- ・ 西から日本海沿岸を進むと、最初の大きな半島
- ・ 九州あるいは大陸から、ヒト、モノ、情報が到来する地
- ・ 西にも東にも開く潟湖
- ・ 日本海交通の中の要所



おわりに

- 交通の十字路、拠点としての松江は、ホモサピエンス到来時から要因は変わりながらも、続いていく。
- 歴史は地勢や環境に影響されながら、つながり続けていく。

65